

書名：モーツァルト・無常
という事

著者：小林秀雄

出版社：新潮社

出版年月：2006年8月（改版）

総ページ数：317ページ

ISBN：9784101007045



推薦者

青葉暢子

鳴門教育大学大学院准教授

社会系コース

本の推薦を依頼されたときに、色々な本が頭に浮かんだ。ヘッセのデミアン、カフカの城、川端康成の古都・・・なかなか決まらなくて悩んでいたとき、ふと思い浮かんだのが、小林秀雄の『モーツァルト・無常という事』だった。この本のことを思うときにいつも思い出すのが、小林秀雄が『モーツァルト・無常という事』の中で書いている「哀しみが疾走する」という言葉だ。学生するとき、疾走する哀しみってどんな哀しみなんだろうねと親友と話したことがある。小林秀雄が「哀しみが疾走する」と表した曲はモーツァルトの弦楽五重奏曲の第4番ト短調だ。この曲が小林に「哀しみが疾走する」と言わせたほどに悲壮感があるのには、それが作られたときのモーツァルトの状況が深く関わっている。モーツァルトが弦楽五重奏曲の第4番を作ったのは1787年5月16日と言われている。第3番が完成して約1か月で書きあげられたことから、第3番と第4番は並行して作曲されたのではないかとされている。この頃、モーツァルトは前年に「フィガロの結婚」で成功を収め、「ドン・ジョバンニ」が完成間近という充実した時期である反面、自身の健康の不調、父親の重病、経済的な不安など苦しい状況に追い込まれていた。そんな中で並行して作られた2つの弦楽五重奏曲は、第3番が重厚で明るい曲なのに対して、第4番は終始物悲しさが漂っていて、モーツァルトの深い哀しみを表しているようだ。「モーツァルトのかなしさは疾走する。涙は追いつけない。涙の裡に玩弄するには美しすぎる。空の青さや海の匂いの様に、「万葉」の歌人が、その使用法をよく知っていた「かなし」という言葉の様にかなしい」（45、46ページ）

小林秀雄は、モーツァルトの妻が、モーツァルトの死後に再婚して初めて前の夫が天才だったと聞かされ驚いたことから、「それほど彼女は幸福であった。彼の妻への愚劣な冗談が誠意と愛情とに充ちていたからである」（48ページ）と書いている。この一節には、以前読んだときに違和感があった。夫の心の闇を知らされず、夫の成功も知らされず、ただ愚かな男を演じられている妻が、なぜ幸福なのだろうか？親友は「心の闇を見せられても幸福なんかじゃないよ。心配をかけまいと愚劣な冗談を言ったことが愛情なんじゃない？」と言った。「私なら、辛いなら、辛いと言ってほしいし、辛いときにはお互い支え合いたいと思う」と言うと、「みんな、そんなに強くないんじゃないかな」と・・・でも、親友と話したことで、モーツァルトの美しい曲だけでなく、愚劣な冗談を言っているときのモーツァルトのことも、なんだか愛しく思えたことが懐かしく思い出される。

モーツァルトの曲は春の訪れのような美しくて明るいメロディーというイメージが強く、そこから想像できるモーツァルトは35年という短い一生の間に多数の曲を遺した天才だ。反面、300通あまりの手紙や、モーツァルトに面識のあった人々の記録からは、天才というよりも、狂気のようなものが感じられる。小林は弦楽五重奏曲第4番から、そんなモーツァルトの心の奥底の闇を「かなしみが疾走する」と表したのだ。この紹介文を書いた後、モーツァルトの哀しみを感しながら弦楽五重奏曲第4番を聴いた。

